

舞姫

與謝野晶子

青空文庫

西の京三本樹のお愛様に

このひと巻をまるらせ候

あ き

うたたねの夢路に人の逢ひにこし蓮歩れんぽのあとを思ふ雨かな

美しくをなごき女をなごぬすまむ変化へんげもの来こよとばかりにさうぞきにけり

家七室霧ななまにみなかす初秋はつあきを山の素湯さゆめで来こしやまろうど

恋こはるとやすまじきものの物懲ものごりにみだれはててし髪にやはあらぬ

船醉ふなゑひはいとわかやかにまろねしぬ旅あきうどと我とのなかに

白百合しろゆりのしろき畑あをさぎのうへわたる青鷺あをさぎづれのをかしき夕ゆふべ

わかき日のやむごとなさわうじやうは王城わうじやうのごとしと知りぬ流離りうりの国に

歌を見てうつぼ柱はしらに秋雨あきのつたふやうなる涙なみだの落ちぬ

日輪ひるいに礼拝らいはいしたる獅子王ししおうの威いとぞたたへむうらわかき君

みさぶらひ御髪みくしに似るは乱菊らんぎくと申すと云ひぬ寝ね寝ねてのみあれば

かざしたる牡丹火ぼたんとなり海燃えぬ思ひみだるる人の子の夢

われと燃え情火環たまきに身を捲まきぬ心はいづら行方ゆくへ知らずも

山々に赤丹あかにぬるなる曙あけぼのの童わらはが撫なででし頬ほと染まりける

花草はなぐさの満地まんちに白とむらさきの陣立ちん立ててこし秋の風かな

灯ひに遠きうすいろぞめのあえかさの落花らっかに似るを怨えん女にょと云ふや

初夏はつなつの玉の洞出ほらしほととぎす啼なきぬ湖上のあかつきびとに

朝に夜に白檀はくたんかをるわが息を吸ひたまふゆゑうつくしき君

木蓮もくれんの落花らっかひろひてみほとけの指とおもひぬ十二の智円ちゑん

罪したまへめしひと知ると今日を書き明日あすは知らずと日記にきする人を

春雨やわがおち髪を巢すにあみてそだち雛ひなの鶯うすの啼なく

二もとの檝かんらんしげる琅ろうかん※の亭の四方を船かよひけり

春の山懸かけひ樋の水のとまりしを昨夜よべの狐とにくみたまひぬ

遠つあふみ大河たいがながるる国なかば菜の花さきぬ富士をあなたに

軒ちかき御座みざよ火ほの気けと月光のなかにいぎよふ夜の黒髪

松かげの藤ちる雨に山越えて夏花なつばなづかひ使野はを馳はすらむか

廻廊を西へならびぬ騎者たちの三十人は赤丹あかにの頬ほして

きぬぎぬや雪の傘する舞ごろもうしろで見よと橋こえてきぬ

高き家やに君とのぼれば春の国河遠とほじろ白し朝の鐘なる

長雨や出水でみつの国の人なかば集つどへる山に法華經ほけきやうよみぬ

夕ゆふべにはちるべき花と見て過ぎぬ親もたぬ子の薄道心うすだうしんに

淡色うすいろの牡丹今日ちる時とせず厄日やくびと泣きぬ病やみ僻ひがむ人

保津川ほつがはの水に沿ふなる女松めまつやま山幹しのかめむらさきに東明しのかめするも

萌野もえのゆき紫野むらさきのゆく行かうじん人に霰あられふるなりきさらぎの春

二十六きのふを明日とよびかへむ願ひはあれど今日も琴かみひく

髮香かうかうたき錦にしきに爪つめをつつませておふしたてられ君にとつぎぬ

わが宿の春はあけぼの紫の糸のやうなるをちかたの川

ゆるしたまへ二人を恋ふと君泣くや聖母にあらぬおのれの前に

春いにて夏きにけりと手ふるれば玉はしるなり二十五の絃いと

すぐれて恋ひすぐれて君をうとまむともとよう人の云ひしならねど

ふるさとの潮の遠音とほねのわが胸にひびくをおぼゆ初夏の雲

天あめとぶにやぶれて何の羽かある夢みであれな病める隼はやぶさ

大夏おほなつの近江あふみの国や三井寺みゐでらを湖うみへはこぶと八月雲す

われを見れば焰ほのほの少女をとめ君みれば君も火なりと涙ながしぬ

梅雨晴つゆばれの日はわか枝えこえきらきらとおん髪をこそ青う照りたれ

鶯あしの餌がひすがたやおもはれし妻は春さく花はやしける

ものいはぬつれなきかたのおん耳を啄木鳥きつつきは食めとのろふ秋の日

大木曾おほぎそは霧や降るらむはゆま路を駄馬だうまひく子とつれだち給へ

岡の家瑠璃るりすむ秋の空の声たてゝ幾ひら桐おちにけり

ほととぎす山の法師がたいおん大音の初夜の陀羅尼だらにのこだまする寺

紫と黄いろと白と土橋つちばしを小蝶ならびてわたりこしかな

二とせや緞子張りたる高椅子のうへに坐るまで児は丈のびぬ

まるやま
円山の南の裾の竹原にうぐひす住めり御寺に聞けば

たたかひは見じと目とづる白塔に西日しぐれぬ人死ぬ

をち
遠かたに星のながれし道と見し川のみぎはに出でにけるかな

物思へばものみな慵う転寝に玉の螺鈿の枕をするも

壁張や花紋のなかにそちむきの黒髪うつる春の夜の家

春の宵壬生狂言の役者かとはやせど人はものいはぬかな

ひえ
比叡の嶺にうす雪すると粥くれぬ錦織るなるうつくしき人

おとうとはをかしおどけしあかき頬ほに涙ながして笛ならふさま

沙羅双樹さらかうじゆしろき花ちる夕風に人の子おもふ凡下ほんげのこゝろ

北海の鱒ます積みきたる白き帆を鐘楼しゆろうに上り見てある少女をとめ

五月雨さつきあめ春が墮おちたる幽暗の世界のさまに降りつづきけり

春の夜や聖母聖なり人の子の凡慮知らじと盗みに来しや

野社のやしらや榛はんの木折れて晩秋の来しと銀杏いんげいの葉に吹かれ居る

君にをしふなわすれ草の種まきに来よと云ひなばおどろきて来む

京しゆの衆しゆに初音しゆまゐると家いへごとにうぐひす飼かひひぬ愛宕あたごの郡ほり

知恩院ちおんいんの鐘かねが覺さまさぬ人ひとさめぬ扇あふぎもとむるわが衣きぬずれに

あやまちは君きみを牡丹ぼたんとのみいはで花はなに似にし子こをかぞへけるかな

君きみは死しにき旅りにやりきとまろ寝ねしぬうしろの人ひとよものないひそね

初夏しゅげのわか葉はのかげによき香かほする煙草たばこをのむをよろこぶ人と

春はるそよと風かぜふく朝あさはおん墓はかに桜さくらちらむとなつかしき父ちち

おもはぬを罪つみと知る日ひの君きみおもひ涙なみだながれてはてなき日ひなり

わが知らぬわれ恋こひふる子このおもひ寝ねの来きしとゆかしむ琴ことききし夢ゆめ

なるたき
鳴滝や庭なめらかに椿ちる伯母の御寺のうぐひすのこゑ

みなつき
六月のおなじ夕に簾しぬ娘かしづく絹屋と木屋と

おほゐがは
大堰川山は雄松の紺青とうすき楓のありあけ月夜

思ひたまへ御胸の島に糧足らずされど往なれぬながされびとを

君が家につづく河原のなでしこにうす月さして夕となりぬ

夏のかぜ山よりきたり三百の牧の若馬耳ふかれけり

かうばん
香盤に白檀そへて五月雨の晴間を告げぬさもらひびとは

君まさぬ端居はしゐやあまり数おほき星に夜寒をおぼえけるかな

朝ぼらけ羽はごろも白しろの天あめの子が乱舞するなり八重桜ちる

春の海いま遠をちかたの波かげにむつがたりする鰐わに鮫ぎめおもふ

もゝ色の靄もやあたたかく捲く中にちさき花なる我かのこゝち

誰たれが子もがりを殯もがりにおくる銅拍子どびやうしぞ秋の日あびて一列白き

梅の花たき火によばれしら髪をかきたれ来なる隣の君よ

白はき羽はの幾鳥とべば山頂の雲いざよひぬ秋の湖

仁和寺にんなちの門跡もんぜき観みます花の日と法師幕うつ山ざくらかな

元日や 長^{ちやうあん} 安^{あん} に似る大道に遣^{やりはご}羽子したる袖^{そで}とらへけり

羽子板に似たりといはばおこられむやりはごすとて棲^{つま}とる人を

ほととぎす水ゆく欄にわれすゑてももの涼しき色めづる君

うらさびしわが家^やのあとに家^やつくと青^{あを}埴^{はに}盛るを見たるこごちに

磯草にこほろぎ啼くや夕月の干^{ひがた}潟あゆみぬ人五六人

紫野なでしこ折ると傘たたみ三^{さん}騎^きの人に顔見られけり

夏まつりよき帯むすび舞姫に似しやを思ふ日のうれしさよ

君を見て昨日きのふに似たる恋しさをおぼえさせずば神のろよ誼はむ

このつかのま悲みの日に伝ふべき甘さと慄ふるへ美しくと笑ゑみ

髪ながきおんかけ溪たにを深う落ち流に浮きぬしろがね色に

高野川河原のかなた松が枝えにかはせみ下おりぬ知る人の家

ふるき城は立てりしづかに山上のわか葉そよぎの薫くんする雨に

うすいろを着よと申すや物もの焚たきしかをるころものうれしき夕

長月の御苑ぎよゑんの朝や露わぶと羅蓋らがいしてまし白菊の花

うたたねの御枕あまた候さくふなりかひなも伽羅きやらの箱も鼓も

相人さうにんよ愛欲おもやせちに面瘦おもやせて美しくしき子に善きことを言へ

牛つれて松明たいまつしたる山少女やまをとめうみ湖うみぞひゆけば家をしへける

春の月縁るんの揚戸あげどの重からば逢はで帰らむ歌うたへ君

あくどしや少し恋しとなす人を撓たゆまず寝いねず思ふと云ひぬ

日は暮れぬ海の上にはむらさきの菖蒲あやめに似たる夕雲のして

たなばたや簾すだれの外となる香炉かうろうのけぶりのうへの天の河かな

妹いもが間は床の瑤瑤めなうの水盤みづいにべにばす咲きぬ七月七日しちにち日

ただふたり海の岩草花しろき夜あけに乗りぬかづき上総の船に

摘みすてし野薔薇ながれぬ夕川の橋の柱にただよひつつも

こうそんじゆ公孫樹黄にして立つにふためきて野の霧くだる秋の夕暮

ほととぎすあはしもふさ安房下総の海上にななたり七人ききぬをとめご少女子まじり

ゆゑしらずわが病むらしの時わかぬ脈うつ手とり死なむと云ふや

ちぬの浦いさな寄るなるをちかたはひねもすかす霞む海恋しけれ

春の里舞ぎぬほさぬ雨の日の柳は白き馬をつながむ

君かへらぬこの家やひと夜に寺とせよ紅梅どもは根こじてはふ放れ

かきつばた白と紫くまなして流るる水に鯉の餌かはむ

粧室けはひやの鏡なみに浪なみのうつるなり海の風めで窓あけし家

かもめゐるわたつみ見ればいだかれて飛ぶ日をおもふさいはひ人よ

ゆく春や葛西かさいの男鋏はさみ刀つづじして躑躅つづじを切りぬ居丈ゐだけばかりに

おん舟に居こぞる人の袴はかまより赤き紅葉もみぢの島さして来ぬ

燭しよくさして赤良小船あからをぶねの九つに散り葉のもみぢ積みこそ参れ

大赤城おほあかぎ北上かみつ毛けの中なか空ぞらに聳そびやぐ肩を秋のかぜ吹く

春雨の山しづけさよ重なりて小牛まろぶも寝てあれと思ふ

秋の人銀杏いしてぶちるやと岡に来て逢ひにける子と別れて帰る

うつら病む春くれがたやわが母は薬に琴を弾ひけよと云へど

やはらかにぬる夜ねぬ夜を雨しらず鶯まぜてそぼふる三日

夕顔やこよと祈りしみるまをたそがれに見る夢ごちかな

薬草の芽をふく伯父の草庵さうあんに琴ひく人を訪とへと思ふ日

ふたたびは寝釈迦ねじやかに似たるみかたちを釘する箱に見む日さへ無き（父君の日に）

牡丹うゑ君まつ家と金字きんじして門かどに書きたる昼の夢かな

冬の日はやての疾風はやてするにも似て赤きさみだれ晴の海の夕雲

春の水船とに十とたりのさくらびと鼓とうつなり月のぼる時

夜よによきは炉ろにうつぶせるかたちぞとうきおん人のものさだめかな

君が妻いとまたまはば京いに往いなむ袂たもとかへして舞はむと思へば

ほととぎす海に月てりしろがねのちひさき波に手洗ひをれば

夕ぐれの玉をぐしの小櫛をぐしのほそき齒をぐしに秋のこゑ立をぐしておちにける髪

水引みつひきの赤あけ三尺の花ひきてやらじと云ひし朝露あけの路

冬川は千鳥ぞ来啼くきな三本木さんほんぎべにいうぜんよぎの夜着ほす縁に

春の雨高野の山におん児ちごの得度とくどの日かや鐘おほく鳴る

うすものや六ろく根こんきよめまつらむとしら蓮はす風かぜす朝舟人に

しら樺をれぎの折木を秋の雨うてば山どよみして鶺鴒かさぎ鳴くも

春の潮遠音ひびきて奈古なこの海の富士赤らかに夜明けぬるかな

御胸にと心はおきぬ運命の何すと更に怖れぬきはに

梅ばい幸かうの姿に誰れがいきうつし人数にんずまばゆき春の灯の街

棧橋さんばしや暮れては母のふところに入るとごとくに船かへりきぬ

玉ひかるべにさし指の美々しきにやらで別れし牧の花草

夕月夜さくらがなかのそよ風に天女さびたる御手とり走る

いづら行かむ君の案内に菜の花の二すぢ路の長しみじかし

舞ごろも五たり紅の草履して河原に出でぬ千鳥のなかに

百とせをかはらぬことは必らずと誓はぬ人を今日も見るとかな

秋の路立たちかく樂らくすなる伶れいじん人の百歩ひゃく歩にあると朝かぜを聴く

牡丹いひぬ近うはべらじ身じろぎにうごかばかしこ王冠の珠

わがこころ君を恋ふると高ゆくや親もちひさし道もちひさし

春の雨衆しゅじやう生なますくひのだいきしや大力者ぬれていましぬさくらの中に

秋霧や林のおくのひとつ家にきつつき啄木鳥飼ふと人をしへけり

よう聞きぬ夢なる人の夢がたりするにも似たる御言葉なれど

君とわれあふひ葵あひに似たる水草の花のうへなる橋に涼みぬ

召されては宿直とのみやつれの手もたゆく草書さうがきしたり暮れゆく春を

悪あくみやう名なの果くわあり今日ある因縁の君を見し日は遠世とほよとなりぬ

来世とやすててこし日の母の泣く夢を見る子の何をののかむ

みづからは隙なく君を恋ふる間に老いてし髪と誇りも為べき

すそ梳けば髪あざやかに琴緒しぬ絃の手知らば弾きに来よ風

人怨じて我ぞよりたる小柱に鬢香のこらむ其下に寝よ

冬はきぬ室に夢見む春夏秋ひつじとまじる草の寝ごころ

いとかすけく曳くは誰が子の羅の裾ぞ杜鵑まつなるうすくらがりに

七つより袈裟かけならひ弓矢もて遊ばぬ人も軍に死にぬ（その僧の親達に）

籠はなてば螢とまりぬ香木のはしらにひとつ御髪にひとつ

六月の氷まるりぬ 深宮しんきゆうの白の珊瑚さんごのみまくらもとに

世に君の御手みてえて今は死なむとぞ昼夜感じ三とせの余よへぬ

春のかぜ加茂川こえてうたたねの簾すだれのなかに山吹ふき入れよ

五六人をなごばかりのはらからの馬車してかへる山ざくら花

森ゆけば霽もやのしづくに花さきしすみれ摘むとぞ名をのる子かな

紅蟹べにがにをさはな怖おぢそねかくれたる前髪みゆれ砂山船に

磯松の幹のあひだに大海のいさり船見ゆ 下総しもづさの浦

紹の蚊帳の波の色する透すきかげに松千ちもとみる有明の月

月の夜の廊らうに船くる海の家すだれにかけぬ花藻らうのふさを

春くれては花にとほしき家ながら恋しき人を見ぬ日しもなき

十余人縁にならびぬ春の月八阪の塔ひざしの廂離ひざしると

水を出でて白蓮さきぬ曙あけぼののうすら赤地の世界の中に

わが家あぐたや芥あぐたながるる川下も美しくと見て在ありける君よ

森かげにならぶ赤斑あかふの石獅子の一つ一つに熱あつき頬ほよる日

われひとり見まく欲ほりする食欲ほを憎ほまず今日も君おはしけり

さくら貝遠つ島辺の花ひとつ得つと夕の磯ゆく思おもひ

みだれ髪君を失くすと美しくしき火焰燃えたる夢の朝かな

かきつばた扇つかへる手のしろき人に夕の歌かかせまし

朝戸出あさとでや離宮まねびし家主いへぬしと隣り住むなる春がすみかな

富士の山浜名の海の葦原あしはらの夜明の水はむらさきにして

水こえて薄月させる花畑にあやめ剪きるなり戸出でし人は

責めますな心にやすきひと時のあらば思はむ法の母上のり

載せてくる玉うつくしき声あると夏の日すみぬわれ水下みづしもに

山かげを出しや五人がむらさきの日傘あけたる船のうへかな

春の夜の夢のみたまとわが魂たまと逢ふ家らしき野のひとつ家

傘ふかうさして君ゆくをちかたはうすむらさきにつつじ花さく

わが知らぬ花も咲かむと雑草に春雨まてる隠みんじや者ぶりかな

大机ちようやう重ちようやう陽やうすぎの父の日をしら菊さして歌かきて居ぬ

田山まうせんや毛まうせん氈せんしきてほととぎす待つと侍はべりぬ十四と十五

釣鐘くろだににむら雨ふりぬ黒谷くろだにやぬるでばやしの紅葉のなかに

あづまやの水は闇ゆくおとながらひけば柱にほのしろき藤

御社みやしろの尾白の馬の今日も猶瘦なほせず豆食はむ故郷ふるさとを見ぬ

戸に隠れわと啼く声の能よう化けし狐と誉めぬ春の夜の家

舞ごろも祇園の君と春の夜や自主権現に絵馬うたす人

くれなるの綾りょうはかまの袴こしゆひの腰結こしゆひのあたりに歌は書かむと思へ

美しくしき御足のあとに貝よせてやさしき風よ海より来るか

いつの世かまたは相見む知らねどもただごと言ひて別るる君よ

二日ありて百二十里は遠からぬ障子のうちに君を見るかな

蝶のやうにもものに口あて御葉みくすりを吸うて来うとも思おぼしはよらじ

春の月ときは木かこむ山門とさくらのつつむ御塔のなかに

遠浅かればに鰈かればつる子のむしろ帆ほを春かぜ吹きぬ上総かづさより来て

塔見えて橋なかばの半はかすむ嵯峨少せうじん人具して鮎あひくむ日かな

上かみつ毛けや赤城はふるき牧にして牛馬はなつ春かぜの山

宿乞ひぬ川のあなたは傘さしし雨のちの後なるおぼろ月夜に

三本木千鳥きくとてひそめきてわれ寝いねさせぬ三四人かな

橋の下尺をあまさぬひたひたの出水でみづをわたり上つ毛に入る（以下六首赤城山に遊びける夏）

石まろぶ音にまじりて深山鳥みやまどり大雨たいうのなかを啼くがわびしき

裾野雨負へる石かと児をまどひ極悪道ごくあくだうの旅かと思ひ

みづうみに濁流おつる夜の音をおそれて寝ねぬ山の雨かな

大剛だいがうの力者あらびぬ上つ毛の赤城平だひらに雨す暴風あらしす

わが通ひ路棹さに花ある沙羅しやらも折れ沼ぬじりの家は夕日するかな

くれなるの牡丹おちたる玉盤ぎよくばんのひびきに覚めぬ胡蝶きとていと皇后

丸木橋おりてゆけなと野がへりの馬に乗る子にもものいひにけり

さざなみにゆふだち雲の山のぼる影して暮れぬみづうみの上

草に寝てひるがほ摘みて牧の子がほとゝぎす聴くみちのくの夏

みじろがず一縷いちろうの香ぞ黒髪くろかみのすそはに這はふなれ秋の夜の人

春の山ひえ比叡せん先だつ達は桐紋きりもんの講社かうじや肩かたぎぬ衣ぎぬしたる伯父おじいかな

君を思ひ昼も夢見ぬ天日てんじつの焰えんのごとき五月ごがつの森もりに

船の灯や水蘆みづあしむらにわかれては海となりたる川口の島

大駿河おほすまが裾野すまがの家に垂氷たるひする冬ふゆきにけらし山は真白ましろき

夕舟やわがまろうどの黒髪にうす月さしぬしら蓮の水

とつぎ来ぬかの天上の星斗せいとよりたかだか君を讃さんせむために

花に寝て夢おほく見るわかうどの君は軍いくさに死ににけるかな（禰津少尉の旅順二〇三高地の役えきに歿しけるに）

みづからの若さに酔へる痴しれびと人は羽ある馬に載せて逐おへかし

おん方の妻と名よびてわれまるさくら花ちる春の夜の廊

紫かすがに春日の森は藤かかる杉大木のありあけ月夜

秋の水なかの島なるおん寺の時鐘うちぬ月のぼる時

病む君のまゐれと召しぬおん香や絵本ひろぐる中の枕に

うらわかきおんそぎ髪うまやの世をまどひ朝暮てうぼの経に驚なくも

初秋や朝顔さける廐うまやにはちさき馬あり驢ろあり牛あり

清滝の水ゆく里は水晶の舟に棹して秋姫の来る

ゆく春の藤の花より雨ふりぬ石に死にたる紅羽べにはの蝶に

秋雨は別れに倚よりしそのかみの柱のごとくなつかしきかな

秋のかぜ今わかかりし画ゑだくみの百日もせかかへらぬ京を吹くらむ
 (西の京なる岡直道の君の追悼に)

手のわかう仮名しりひける字を笑みぬ死なむと見しは誰たれならなくに

行水や柿の花ちる井のはたの盥たらひにしろき児をほめられぬ

波の上を遠山はしる風のたび解けて長くもなびきける髪

ふるさとに金葉集をあづけ来ぬ神社みやに土座どざする乞食かたるの媪うばに

大馬の黒の背鞍せきあんに乗りがほの甥をひとに訪とはれぬ野分のわきする家

君見ゆるその時わかぬ幻境の思出ひとつ今日も哀しき

画師の君わが歌よみし京洛の山は黄金の泥でいして描かけな

白牡丹はくさける車のかよひ路に砂しゃごん金しかせて暮を待つべき

おん胸の石をすべりし逸矢それやともつくつく日記にきを見る日もありぬ

扇ふたつ胡蝶のさまに夕闇の中をよりきぬ灯のあづま屋に

菜の花の御寺も桃のおん堂も仏うまるる人まうでかな

ひがし山やどのあるじにおどされぬひひなぬすみて来しやとばかり

やはらかき少女をとめが胸の春草に飼はるるわかき駒とこそ思へ

君うれし恋ふと告げたる一瞬に老いてし人をよくみとりける

あらし山雨の戸出でて大きなる舟に人まつただひとりかな

この雨に暮れむとするやひもすがら牡丹のうへを横し斜しななめ

秋かぜは鈴れいの音かな山裾の花野見る家の軒おとづれぬ

春の雨橋をわたらむ朝ならば君は金糸きんしの簀みのして行けな

秋の風きたる十方玲瓏じふばうれいろうに空と山野と人と水とに

わが哀慕雨とふる日に※死いとじぬ蝉死ぬとしも暦を作れ

川ぞひの芒すすぎと葦のうす月夜小桶はこびぬ鮎あしひたすとて

よき朝に君を見たりきよき宵におん手とりしと童わらはなき泣すも

まくら二尺さりて水ゆくあづま屋に螢こよなうもてはやす人

舞の手を師のほめたりと紺暖簾こんのれん入りて母見し日もわすれめや

あけがたの鶯ききし空耳の君がまた寝を難じて居たり

わが肩にいとやごとなき髪おちてやがて捲まかれて消し春の夢

君に似しきなりかしこき二心にしんこそ月を生みけめ日をつくりけめ

この恋こひぎみ君うらみたまへどそひぶしの寝物語もさまよきほどに

野ゆく君花に聴かずや語部かたりべも伝へずありし幾ものがたり

おもはれぬ人のすさびは夜の二時に黒髪すきぬ山ほとどぎす

月の夜をさそへど出でずこほろぎを待つと云ふなるとなり人かな

春の月おとうとふたり笛ふいて上ゆく岡を母とながめぬ

きぬぎぬや春の村びとまださめぬ水をわたりし河下の橋

春の朝われ黒髪にたきものす鶯まるれ目ざめし人に

炉にむかひ鼓あぶりてもものいふを少女と誉めぬわれいつく母

君が妻はなでしこ挿して月の夜に鮎の籠あむ玉川の里

夕ぐれのさびしき池をわかやかにあをあし青葦ふきぬ初夏の風

あつき日の流ながれに姉と髪あらひなでしこさして夕を待ちぬ

岸に立つ袖ふきかへしもみうらの紅あけを点じてゆくや河かぜ

目に青き穂麦の中にもいろいろのひくき靄もやする花畑かな

おほかたを人とおもはず我だけ猛くなりだけにけらしな忘れし君

くちびると両手に十の細指はわれの領なる花なれば吸ふ

ふるさとを多く夢みぬ兄嫁の美しくしきをば思ふと無きに

彼かの天あめをあくがれ人は雲を見てつれな顔しぬ我に足らじか

帆織る戸へ信おきのたいふ天翁になを荷ひ入る人めづらしや初冬の磯

紅梅に幔幕まんまくひかせ見たまひぬ白尾の鷄かけの九つの雛

しら梅や二百六十二ふたたり人は女王にょわうにいます王祿の庭

花に似し人を載せたる唐船たうせんに大君ふきぬ春の山かぜ

男こそうれしと見ぬれいかがせむあらぬ名著たる大難の日に

舞姫のかたちと誉めよむかしの絵そへ髪たかく結ひたる人を

春の雨障子のをちに河暮れて灯に見る君となりにけるかな

ほととぎす戸をくる袖の友染に松の月夜のつづく住の江

人妻は高き名えたる黒髪のうちろを見せて戸にかくれけり

京の宿に五人の人の妻さだめ妻も聞く夜の春の雨かな

磯草にまどろむ君の夢が生むさくら貝こそひろひきにけれ

天人の飛ひぎやう行自在にしたまふとひとしきほどのものたのむなり

頬ほに寒き涙つたふに言葉のみ華やぐ人を忘れたまふな

半身にうすくれなるの羅うすもののころもまとひて月見ると言へ

(明治三十九年一月)

青空文庫情報

底本：「現代日本文学大系」55 與謝野寛・與謝野晶子・上田敏・木下杢太郎・吉井勇・小山内薫・長田秀雄・平出修集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月5日初版第1刷発行

入力：福岡茂雄

校正：ちはる

2000年11月30日公開

2003年5月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

舞姫

與謝野晶子

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>